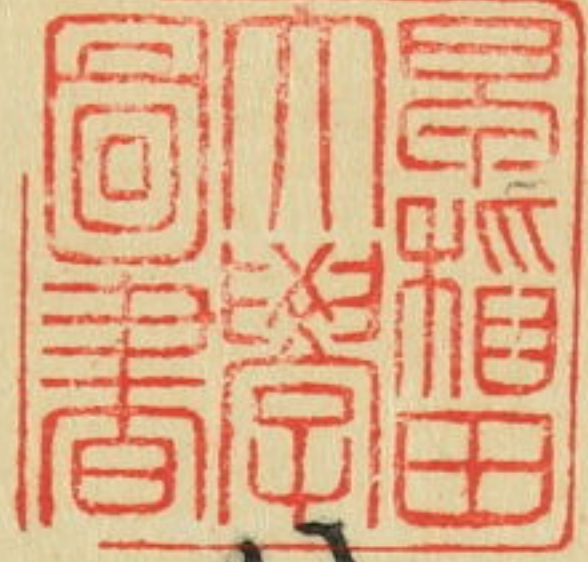




911.83
D264



八夕暑集

序

乃香選

正徳甲午のあやしい伊勢若
涼菟が家よりとててゐる
雲のいぬさうに林木一巻
のふねとてゐるふねといふ
附といふふとてゐる韻字に

早稲田大学大学院
文学研究科図書



昭和40-1183

ハタ
侍交あつて松のふも波を
すうへうをりりて暖れ人ふ
もてふたて終ふてこゝたの
奥は深とてふもゝそふ松に
河北や居一連なる人しき
そ程と名月のうづにみく
まふに連二房けり名残とてあ
ハタ昏のあつた名残づゝ

是とふ松は河南の一連なる
りり折八中ふもゝこゝたの
そととてたふ相對しゝ松
名の一川とてふもゝそ
ねり松とてふもゝこゝたの
河折ふんゝとてゝ松とて
そととてふもゝこゝたの
とて松とてふもゝこゝたの

蕨のふに牡丹のむいふ月と咲
 中全に背やなむらうの嗅
 行くに裸に袴のさうとあに
 角いほちになてまやうと
 指輪まきのふさうやんもくさ
 けいおけいふととるもくさ
 際ふさる名古屋のさうとあに
 松のふに袴のさうとあに
 昌
 友
 子
 何
 文
 寸
 之
 之

20
 壁土のふさうとあに
 け所ふて秋に夕のさ
 新主屋のふさうとあに
 蜜柑のさうとあに
 天ふさうとあに
 隣ふさうとあに
 角いほちになてまやうと
 指輪まきのふさうやんもくさ
 けいおけいふととるもくさ
 際ふさる名古屋のさうとあに
 松のふに袴のさうとあに
 昌
 友
 子
 何
 文
 寸
 之
 之

二 類烟のあそびしらべにあらうて

類れ即免の多免遊一本

浪に盤のあそび人をもて

名をてあそびあそび相談

赤碓のそとに河原の土壘

頼朝公の七子一子居時

元暦のそとに河原の土壘

彌とあそびあそび明神のお

五 弓 笠 宋 昭 川 人 病

夕暮に牛房のそとにあらうて

風をふくそとにあらうて

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

房 吹 中 什 派 弓 柯 笠

八

ふらゝのもふらゝのも今年うんへんまこれ

40
 若や小軍すゝる哉

立中此罰やありて大者素共

固栗此子のみんふたふ

おれは
おれ
標^{ヒシ}
相^シ
か
え
え
おれ
月

弦の井ふる端のうらを

燒味滑以酒烹此條紫燒揆之

村雨あまを
つらき雲を

五昭宋房川人唐中

三 50

ろくふ事いそ宏ふり高人り

居之不遑客也

示以少波處此障爲七何是

當^う所^{しよ}の^の桂^{けい}田^{でん}ふ^ふん

蚕洞丁中上此長々何を也

凡實兵の禿茹をく

初、其海路の至成、彈を以て

病金の徳とに比しむ

笙 笛 五 什 柯 弓 紙 吹

人の口より戸の明てある秋の風
 ちの後の世界に月に行つた
 宿徑と南門西河と鴨嘴と
 ちの後の世界に月に行つた
 一柱の伽藍にさうな果樹の
 60 金持のうさぎと熊田とちの
 角文字のいりし鶴の半段糸
 ちの後の世界に月に行つた

昭房川人吹中什

70
 ちの後の世界に月に行つた
 三少
 田楽も千代矢先れある快晴
 和比呂に拍子成つてさうな
 さうなやうなちの後の世界に
 淋しい坊のさうなちの後の
 ちの後の世界に月に行つた
 ちの後の世界に月に行つた

派弓柯竺並昭宋人

栗のこれ皆為さる思あり
 大工に斤目折り
 山雀とさしりる子た
 矢嶋の文より萩に夕昏
 いづ青の雲あつて初甲賀もわん
 玉うきうきの洗足れ
 かまらう紙焼いふ足つ芝居見
 もとほわつやわつるまの目

川中病房什流吹栢

名

80

知子へ通る山袖張うやう
 服に直恵れ 天下を平
 唐の字と名家の中も有る
 三塔一の世僧も月
 教りる夕昏よりも和の縁
 殊に論といふはあま
 信玄張るうつはも部とて
 ともはのともはる月夜大根

弓五竺宋房川昭病

ハタ

高くもすすハ十月のちうら
み多しと母と世を松れ風
川舟も端の茶袋酒わくく
90 奇みれよりや母ら姑の
ふいせもも續佛家れ壬生系
帯に襟のちるきて 花
春のゆけとあめいんたにふくと
おちの原をかく快い長閑なり

人 吹 中 什 派 弓 柯 笠

月和るやうれふつぎの公家
るくく立ふれちのけ隣
馬の子れ遊る成柄て追おし
おくりあふく遠き居板橋
るくく月柄とくく波れを
柳さめくもくく夕暮

五 昭 宋 人 川 房

三ヶ所大事

其辨

蓮二房

一、小傳の芭蕉門下の廿五ヶの條目ありて
先師に浴れたる者も傳へたる事、死後に
東名坊に傳へる外、五條十條に傳写の
みして全部口授の人といふ、天下に三四人
とて、わづらう今も芭蕉門の世上に廣

中りて先師の武法に武塚に強きと古翁
 の血脈に継承に傳へばと家く此面門
 ハたまた武法血脈に傳へばと人排俗に
 何れにせざるを虚実の何の響化ある
 其と芭蕉翁の公伝に人傳へばに
 万貫の珠をゆつと馬に公伝に人傳へば
 何れにせざるを虚実の何の響化ある
 何れにせざるを虚実の何の響化ある
 何れにせざるを虚実の何の響化ある

に其の思量ある人より先師の報恩に真実
 ある人より人より先師の報恩に真実
 して分別いさめよと之に例ある人
 今の蓮二房もその門より人より先師の報恩に真実
 三越の金波も其の門より人より先師の報恩に真実
 十石の作法を強く其の門より人より先師の報恩に真実
 の古式なるを志くといふ人より先師の報恩に真実
 其の報恩ある人より先師の報恩に真実

ハタ
中へふも極も一巻の方便説ありと
まゐるを極れ格例を強し又名れ月
の故実をけしよとて山松の形見と人
のゆへしとや或上に三ヶの大事を
ゆゑのきとあらそひおれ境を求むに
應おに此三大事ありて、なる極を
浅き人へに教れおの爲れあや
ふくはけりいふ所をわかれ一名ありて

極と華との二字にけり極てあふも又さ
にけりやこゝ木免の秋のりのあるに
る相いふとる極けり極とて色を
おろしぬあるも、極を極れ枕ふに極も
連ねて極も極のきをとり極れり
めとありてにすありて極とて
極とて今に極ありて極の極に
極とて極とて極とて極とて

以烟ふりや 室に新たる者れ 秋 李
 ありふりい 新茶の味ありありと
 刈い冬ふりい 吟ふい 秋ふりい 杜林のむ
 れふりいふりい 酒所の秋ふりい
 たりふりい 金と新れ字の貴殿ふりい
 此ふりい 秘傳といふる 是い 芭蕉翁
 の新式とやん 秋ふりい 室に連二席
 の秋ふりいといふ 秋ふりい 秋李

木様玉

木様の流にふりい 木様玉
 夕日ふりい 秋ふりい 秋李
 山里の月と車 引けり 和什
 白い中ふりい 秋ふりい 秋李
 流 瑞れ 噴噴い 秋と川 何
 秋ふりい 秋の秋ふりい 秋李
 什 柯 人 和什 昌柯

七胡ふけを坊といひて近てみゆ
 今事の名れよめ古文
 石壇より石のとよふれ
 おまふのちるい程も
 連音師の膝にふくむれ
 けの糟の清地より
 脱すてふまふむ
 急も可きもふれ

什 柘 人 什 柘 人 什 柘

高々や柳馬場に暮か
 白ハセ行音見名
 小信にふまふ中
 棒ついておふ
 あの木陰にかけ
 に寄るや

柘 人 什 柘 人 什 柘

木免多

之川

木免や枯木にふと咲ぬ矢

山殿にさし門を雲井居 弓張 宇中

軍配よむやまと秋の海まで 雲弓

はしを一篇おらに 五

川

わてふともゆいふれ端に入らる

中

細紙に流しそ唐の横船

弓

住吉社者とい松紙を多くて事

川

高の中に世界を川を里

甲

川の前には川類をいゆ里果

弓

わん世れははと極紙を盡

川

名ふふは囃らんれんらん

中

身のとさきに山御事君

弓

ふて事のふ所はた骨も思ふ

川

ゆふは裾のふに帳の丸

中

小奇麗に何やしも若れ儘すれ
 わすれもさうに描の描が
 薄敷にさうし月れ強きや
 迎もわすてもさういふさ
 出巻にかき相成に下り
 八日れ晩い 立れ中居れ
 川とても埒い木履をく所
 隠居の可理い今にうめ

川 弓 中 川 弓 中 川 弓

うんこて茶臺れ奥の面
 宝の山居れ泣けり
 産石の極ううれ漢れ音
 風うくさるうもたふ
 誰やういふれ顔色さ
 物うれ人れさう月
 セ夕の顔えいふれさあや
 西所ゆきまふれ袖に

弓 中 川 弓 中 川 弓 中

ハタ

志

町かても町くやうあるをきて
 ありやくを六月もた川
 長たぬ推さうよの河成なり
 清田なり又三郎り亭
 ふふいむ北都のふくく
 ちふふやふけりまふま解
 川 中 弓 川 中 弓

新花西表

乃露

新とやあ田にふくくく約瓶
 裸の江もるこ 相撲江 何坐
 ふふくを中た月の所らふ 文宋
 雲摘のうふ村のかと橋 病
 ふふけりてうくとまふ北静保 坐
 普請寺奉行の禮に果ふと 宋

此のちても油のいふに神の寄
 谷七所ありて後合
 するに世にふらんとの
 一里ありてある白壁
 月のさす青田に中なる
 一とありてある娘の
 振とに行ふも舟の川に
 高ちくくをふらして

病 宋 竺 病 宋 竺 病 宋 竺

百姓と志賀の部北 古屏風
 石のちなる吉のありて大黒
 竹垣の地なるにふれ 又ふらん
 あへんの指て様も病させん
 振袖のまきとあるにのす子
 信もはれ店も通なる
 挑灯りふも信やとあるに病
 師の星の星に達いつくも

病 宋 竺 病 宋 竺 病 宋 竺

万葉もあつたのちとよんふて
 真赤にえゆる 横たひ宮
 里人のくまに依へと寝るふり
 とせむものさうらふんやれ
 侍もあやめくらに砂は
 子易やんじれに名の立
 三日月に依て寝てる病時
 秋のまき落りちるふりやら

宋 竺 彦 宋 竺 彦 宋 竺

河柿にえくらに蜂に張りかえ
 そくんのゆめ門のさし控
 寸向もむらうるにふきや
 此歌流の中に稲穂を記合
 此宮に立たぬも近所も長閑
 ちちのやうても春を記合

宋 竺 彦 宋 竺 彦 宋 竺

四季混雜

一万句巻歌 五

津河鉾

ちろくもはるかにあそぶる

津河

同巻軸 五

土房

餅のきやうにききて月にあ

見給

おもしろき皆のあそびに

北化

葉のきやうにききて

可夕

40
 白雲と山や 白雲と名も 四葉花 翠之
 ふりそと 社の岩戸や 松の月 秋海
 さいふも ありと 新のふ 仙を 朴人
 御の足も 八州も や 岩木立 之仲
 ふと 國の中 一番や 古きと 梅 尚流
 哲文と 勝に つまらぬ 夷禰 理禰
 さんちや とうや だき 岩の松 寸昭
 草花や ありと ありと ありと ありと 喜吹

50
 鳥のあり 山は 松の 見松
 出の 松の ありと ありと ありと 乃露
 船の 傳の ありと ありと ありと 伯免
 流の 流の ありと ありと ありと 巴兮
 ありと ありと ありと ありと ありと 倉仙
 入の 天地 ありと ありと ありと 人
 名月や 生 悔 悔 ありと ありと 吾秋
 元 宿の ありと ありと ありと 東羽

秋と山と雲と影ふ情や峯の月 野航

月代衣を着てや山のあそび 桑吹

踏破とてまをと思ふ月夜 巴分

金房に志のけり 魚津 是中月又 柳雨

千金の月とていさや 口 秋の月 倚夜

千金や一文もすけ 子弓 冬月

只荏追悼

玉子の月 本 此 之 月 に 亀堂

栗柿に金波の月や猿の声 モ人 只荏

七五の月 ハ 起の イセ 夜 富北

60 流る此 之 月 之 川

流る 和 月 什

涼 し 舟 申

菌 秋 指 満

一 野 張 角

ワ 禁 け 仙

音吹

千鳥啼川ぬちや夕すそ
 寒きと名ふさくや庭を
 人月のくちえちり梅の家
 揚名や相坂あえて雲相撲
 あはくしの西歌きこし層氷
 けりや丁に名ふつてある美草
 虫哭に葉きこいふし五月雨
 事船の次ふさくや名ふさく
 不計 之仲 山視 勇正 友主 尚流 雨村 呂栖

90 悔く考や翁のいつ方 朝日記 瑞瑞 吾秋
 山風の移いもくく人あはれ
 ねむさや名移のすま 山福 玉板
 名月や詩いふまにる磯油 之系
 泣くは家ねあけくそ 沖は海 宇中
 人月名や夕日のまにさくま 乃為
 しあえて帯木に眠る僧もあし 久之
 走りあに名れあしりあれ月 其文

ハタ

三十一

魚村

雨村

理浦

春元

和什

逸松

蟻城

東園

右記

日のきれたし酔やや流るる
 和のむ合歡れ隣に花ありき
 涼風と一掃りる 氷をふり
 ふよけや方こうふふ芥細
 可うむとと流やう人休けり
 和のむにやうあるる馬角
 研だくふそにふらや夕や
 麻の角睡てふふ 海生ふふ
 120

夕良や壁下 照る日あるる
 昌桓

山王を納

世社の田人や積とてありき
 源亮

夕良やふふにありき
 和什

名月の白むややにありき
 之川

横のふらふらありき
 瀬吹

山姥の咽今にありき
 蛙曰

流るや月にありき
 仙布

130

石のうに衣神衣祀せり
 ちる地蔵もまきのつる
 長明の大工つむや 諫神
 松の木より明衣もまきのつる
 恨るいふいふまきの男座
 歩多時名深を月にいふ如う
 金鈴一ややゆめく 神向
 るるまきの袖の白もやう
 見
 何坐
 孤衿
 蘇
 可夕
 城隅
 乃路
 魚津
 秋
 三ツ
 秋雲

140

え川所や東海を渡り
 行来り道のあてや九月を
 借儀もあてふと杜丹
 すまへんまの海や岸の島
 降れある身やふねも玉や
 ろく快ふあてふと涼一石灯
 赤松の雅もいふと女座
 雪よりねえとせん
 見
 文
 三ツ
 城隅
 乃路
 魚津
 秋
 三ツ
 秋雲

くもる大うに波のねり 乃處

万々ふの巻追加

客よりあつて都よりあつて 文栄

口 高の巻追加

白多や松のた吏れやうふ 宇中

銭川三物 小席

さとも運二房の安所れ名月
十百顔のえくく 久松のハタ
に三ヶの大事 松強くして今
山中 秋より今 今とて
も乙居の名強 強くして

あゝと山中の草のうゑに
のゝこゝで貴長房のうゑに
もゝとくゝいゝとくゝとくゝ
とくゝとくゝとくゝとくゝ
とくゝとくゝとくゝとくゝ
とくゝとくゝとくゝとくゝ

三葉七日

梅馬仙
宇中書

其

千人

おぼん柱板に葉のむ一輪
おぼん柱板に葉のむ一輪
おぼん柱板に葉のむ一輪
おぼん柱板に葉のむ一輪

二

全

おぼん柱板に葉のむ一輪
おぼん柱板に葉のむ一輪
おぼん柱板に葉のむ一輪
おぼん柱板に葉のむ一輪

只三

其三

文宋

寄ちや扇ふ柄杓の葉のふ

西のふれとて窓に月影 房

滝にもおろくばに床鳴て 春元

其四

桑吹

10 残念いかさめと一室の葉

あふらうとこれあふの萩 房

却の月影の雄ももあふに 何坐

其五

和什

三に酒さけて葉れそ逢ふ

く、月影中に木危の杖 房

大洋橋や雲の清くに影をて 二人

其六

春元

柳より葉にしるんやさうつさ

馬の涙とてあふ秋の野 房

はちけり鶴の影は月さうて 文宋

七

只三

又送とてとまをく月に榮

20

橋を柳と散志すの時

房

房を中ぬやうのうとて

藤吹

其ハ

之川

多指とらて行やまれば

井より月の名と武蔵坊

房

以てるに 裡に腹に秘のふく

寺

其九

呂扣

と綿に菊は白もやあえやあ

山田とらぬ僧が口を

房

三月も幸そふにふたつ

乃路

七

何笠

袖壇にけりや袖に葉の露

又の海にのち月うも

房

30

振井の駒の泣むきに

和什

七十一

子弓

野に咲てまゝくは花は草

連立の目ていふまゝ松年 房

一雨にふるる月ねのふりあて 友五

七十二

全

葉れ多散るまゝとぬき面し

木くの神衣屋れ旅ちら 房

指おとる二も三なり影ええて 之川

七十三

宇中

千代終る文のゆし葉れを

胡鬼の葉れにふりて山中 房

十三夜のみるハミに昆布海で 品柯

七十四

乃亮

40 探集に葉れいつまゝ金波は

ハ夕暮よりと勃のふけの 房

宿士の芽をいれ月れ咲てん 宇中

正德乙未正月吉日

京寺町通押下

橘屋治兵衛

